

英国の入試制度

—より適切な大学入学者選抜を目指して—

ロンドン研究連絡センター

木谷 由佳

1. はじめに

現在、日本では大学入試の在り方について、大きな議論がなされている。現在の入試制度の主な問題点としてよく挙げられる主なものは、次の二つだろう。一つ目は、事実上学力の把握措置ができていない推薦入試や AO 入試の普及によって、高校段階での最低限の学力保証ができていないのではないかということだ。二つ目としては、高校での教育の質保証に取り組んだ上で、大学入学者選抜においては、現行の年一回のセンター入試のような 1 点刻みの点数を競うのではなく、面接や論文により多様な能力・適正を評価する必要があるのではないかということが挙げられる。政府の教育再生実行会議や中教審で入試制度改革に向けて本格的な討議が行われており、高校在学中にいずれも複数回受験できる「達成度テスト・基礎レベル」と、「同・発展レベル」を創設し、後者を現行のセンター試験の改編版として一般入試に活用する制度設計が進んでいる。発展レベルでは、成績を 1 点刻みではなく何段階かのランクで表示し、各大学は、面接や論文、高校時代の活動内容と合わせて入学者を選抜するという計画だ。

このように現在改革の時にある大学入試は、日本においては制度の改善に向け常に注目されている話題だが、筆者がロンドン研究連絡センター在任中に驚かされたのは、日本同様、あるいはそれ以上の英国の人々の関心の高さである。英国の入試制度もこれまで様々な改革が行われてきているが、一般市民からのマスコミへの投稿等も活発で、これらを踏まえながら大学関係者を中心に自律的に改善方策を考えていこうという姿勢を感じた。

本報告書では、マスコミや大学関係者による受け止め方を交えながら、英国の入試システムについてまとめ、今後の日本の参考となる部分を探していくことができればと思う。

2. 英国の大学入試の概要とその中での UCAS の役割

2-1. 英国における大学入学までの流れ

英国における大学入学までの流れをまとめると、次のようになる。

表 1 英国における中・高等教育および大学入学までの流れ¹

年齢/月	教育	学校	資格試験、出願の流れ
16 歳 義務教育最終学年	中等教育 (前期)	Secondary School	GCSE 試験受験。 通常 8-10 科目受験。評価は A-G の 7 段階。
17 歳 5-6 月	中等教育 (後期)	Sixth Form 等	GCE-AS level 試験受験。 通常 4-5 科目受験。評価は A-E の 5 段階。
17 歳 1 月			GCE-AS level 試験の結果発表後、 翌年の GCE-A2 level 試験で取得できそうな成績を予想し、 UCAS のオンラインシステムを通じて大学に願書を提出。
17 歳 3 月			大学は UCAS を通じて学生に審査結果を回答。 翌年の GCE-A2 level 試験の結果によらない無条件入学許可 (unconditional offer)、または結果による条件付き入学許可 (conditional offer)の通知を出す。
18 歳 5-6 月			GCE-A2 level 試験受験。 GCE-AS level の受験科目の中から、通常 3-4 科目に絞って受験。 GCE-AS level 試験の結果と総合し、A*-E の 6 段階評価。
18 歳 8 月			最終合否結果発表。実際の A2 level 試験結果を受けて、 上位大学への志望変更 (Adjustment) や、 欠員のある大学への補充申請 (Clearing) が行われる。
19 歳 9 月	高等教育	大学等	大学入学。

英国では、義務教育終了の 16 歳時に、GCSE (General Certificate of Secondary Education) と呼ばれる普通中等教育試験を受験する。これは、義務教育を終えるにあたって、十分な学力が備わったかどうかを判断するものであり、その結果は大学へ入学を出願する際の判定材料のひとつとなる。生徒は国語、数学、科学、体育のコア科目に加えていくつかの基礎科目を選択し、おおよそ 8 から 10 の科目を受験する。A から G の 7 段階評価であり、続く A-level 試験に進むには通常 A~C の成績が必要となる。

義務教育を終えた後、大学への入学を希望する者の多くはシックス・フォームと呼ばれる後期中等学校 (以降、高校) へ進学する²。シックス・フォームでは、GCE (General Certificate of

¹ 教育再生実行会議 (平成 25 年 6 月 26 日開催) 配布資料 資料 1-1 諸外国の大学入学制度
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaizei/dai10/siryou1_1.pdf, アクセス日 2013/12/04
UCAS Admissions Process Review Consultation –Section1-6

<http://www.ucas.com/about-us/inside-ucas/key-documents#content-toggler>, アクセス日 2013/12/17

² 私立に進学する場合、多くは 7 歳前後から Preparatory School へ進み、13 歳前後から入る Independent School / Public School において GCSE を受験する。

Education) 試験を受験する。第一学年時に Advanced Subsidiary (AS) level、第二学年時に A2 level を受験する。これらをまとめて通常 A-Level 試験 (正式名称は The General Certificate of Education Advanced Level) と呼ぶ。A-level 修了には、AS と A2 両方の試験において同一科目の成績が必要になるため、学生は AS 試験での受験科目の中から A2 試験での受験科目を選択する。試験科目は、普通教育の科目を中心としているが、同じ分野の中でも応用的なものを含めて複数の科目があり、学生は 100 を超える科目から選択する。AS 試験は A から E までの 5 段階 (それ以外は不合格) で評価され、AS 試験と A2 試験の結果を総合し、A-level の最終評価が、A* (A スター)、A から E までの 6 段階 (それ以外は不合格) で評価される。A* は、AS と A2 の両方で A 成績で、かつ A2 で 90% 以上の得点をとった場合に与えられる。通常一般の大学では、A* から C の成績が評価対象となり、多くの大学は 2~3 科目の合格を必要条件としている。

各大学は、あらかじめ A-level の合格基準スコアを定め、公表している。学生は、通常 1 月³にシックス・フォームの担当教員等が出す A2 試験の予想スコアと、志望動機書 (Personal Statement)、推薦状、GCE スコアを UCAS という機関を通して大学に申請する。最大 5 つまで出願することができる。大学は申請書をもとに、翌年 A2 試験の結果による条件付き入学許可 (conditional offer)、または無条件入学許可 (unconditional offer) のいずれかの通知を出す。医学や法学のコースでは、面接試験や別途の筆記試験を実施する大学が多い。条件付き入学許可を受け取った学生は、第 2 学年の 5~6 月に受験する A2 試験の結果が大学側の提示する条件を満たしていれば、最終合格となる。なお、条件付き入学許可の場合、第二志望のコースを第一志望のコースの要件を満たさなかった場合の保険として保持しておくことができる⁴。また、A2 試験結果が予想スコアを上回り ABB 以上の成績だった場合には、8 月中により上位の大学に志望を変更することができる (Adjustment)⁵。逆に、結果が予想スコアを下回り、入学条件のスコアに満たなかった場合は、学生定員に欠員がある他の大学へ、欠員補充の枠に申請することとなる。これは Clearing と呼ばれ、9 月下旬まで行われる。

公私の学校制度の種類: 英国教育相 <https://www.gov.uk/types-of-school>, アクセス日 2013/12/04

³ オックスフォード大学とケンブリッジ大学は前年 10 月の出願が必要となるほか、独自試験の受験が求められる。なお、両大学の併願はできない。

⁴ 条件付き入学許可を第一志望として受け入れることを firm acceptance、第二志望として受け入れることを insurance acceptance と呼ぶ。

UCAS <http://www.ucas.com/how-it-all-works/undergraduate/tracking-your-application/replying-your-offers>, アクセス日 2013/12/04

⁵ 以前は、各大学は政府から割り当てられた学生数 (Core number と呼ばれる。定員数は各大学により異なる) 以上を受け入れることはできなかったが、2012 学事年度より、一定の成績以上の学生については、政府から割り当てられた枠以外に、大学が自由に学生を受け入れられるよう、入学定員管理が緩和された。

2013 学年時は、A-level で ABB 以上の成績を獲得した学生については、大学が Core number 枠とは別に自由に入学させることができる。これは、2011 年から大学への運営費交付金の削減が行われているなか、大学自身による資金獲得と大学間の競争を促し、学生の選択の可能性を広げることを目的とする。

なお、2013 年 12 月に発表された政府の秋季財政報告によると、イングランドの大学について、2014 年度は入学定員枠を超えた受け入れ人数の上限を 30,000 人までに引き上げ、2015 年度以降は定員枠そのものを廃止する計画である。

UCAS <http://www.ucas.com/how-it-all-works/undergraduate/understanding-student-number-controls>, アクセス日 2013/12/19

英国政府 Autumn Statement 2013

<https://www.gov.uk/government/publications/autumn-statement-2013-documents>, アクセス日 2014/01/30

2.2 UCAS の役割

大学への出願に関して、申請の取りまとめ等を一手に行っているのが、UCAS (Universities and Colleges Admissions Service) という総合出願機関である。UCAS のウェブサイトには、英国における 400,000 以上の高等教育コースの情報が掲載されており、学生は自らの興味のある分野のコースを検索でき、入学要件、授業料、選考手続き等の情報を得られるほか、オンライン上で出願する。学生のみでなく、学校もアカウントを持っており、学生がオンライン出願手続きを終えた後、学校担当者が推薦状や A2 試験予想スコアを UCAS に提出する。また学生の願書に誤りがあった場合は、修正のため学生へ差し戻しを行う。8 月の合否発表以降の Clearing への応募についても、UCAS を通して行う。

UCAS は、各大学がブースを設置する学生のための大学入学フェアを主催しているほか、学校の大学入学担当者向けの説明会も英国各地で頻繁に開催している。筆者は、2013 年 10 月 21 日にロンドンで開催された、学校関係者向けのイベント⁶に参加してきたが、シックス・フォームや大学の関係者へ、オンラインシステムの使い方から望ましい推薦状の書き方まで、きめ細かなアドバイスがなされていた。

また UCAS は、高等教育にかかる政策や予算等の状況により、出願制度の変更を随時行っている。2004 年、入試プロセスの公平性・透明性についての報告書 **Fair admissions to Higher Education: Recommendations for good practice** (通称 **Schwartz Report**)⁷が発表された。入学資格条件、合否判断の明確化の重要性を述べるこの報告書は、英国の入試改革の大きなターニング・ポイントとなった。この報告書を受け、UCAS も改革を行った。大きな変更は、志願者は、5 つまで大学・コースの出願ができるが、大学側はその志願者が他にはどの大学・コースへ出願しているのか分からないようにした点である (**Invisibility of choices**)。以前は、出願者が最大 5 つの志望コースの中で、自らの大学を何番目に希望しているのか、大学側に一目瞭然だったため、高い希望順位にある大学は入学者獲得のために授業料の値引きを提供し、低い希望順位にある大学は不合格にするといった公平性の面での問題が見られた。また報告書にある提案の実現促進のため、2006 年に、高等教育における入試の質の維持・向上を図る公的独立機関 **SPA (Supporting Professionalism in Admissions)**⁸が設立された。UCAS は、英国の大学擁護機関である **UUK (Universities UK)**⁹とともに、SPA を支援している。

⁶ The Applicant Journey <https://www.ucasevents.com/applicantjourney>, アクセス日 2013/12/19

⁷ Charles Clarke 教育技能大臣 (当時) の依頼を受け、ブルネル大学の Steven Schwartz 教授率いる独立審査機関がまとめた報告書。
<http://www.admissions-review.org.uk/downloads/finalreport.pdf>, アクセス日 2013/12/19

⁸ <http://www.spa.ac.uk/>, アクセス日 2013/12/20

⁹ <http://www.universitiesuk.ac.uk/Pages/default.aspx>, アクセス日 2013/12/20

3. マスコミ等における大学入試の受け止め方

ここでは、2013年の大学入試について、代表的な新聞での取り上げられ方についてまとめたい。A-level 試験結果発表の翌日である2013年8月16日、TIMES、The Guardian、Independent、The Daily Telegraphをはじめ、殆どの新聞が一面トップで数ページにわたって、有名大学への合格者のエピソードを含めて詳しく報道していることにまず驚いた。全体的な印象としては、2013年の入学者選抜を高評価する論調が目立った。



写真1 A-level 試験結果発表の翌日の紙面 —試験の記事が殆どの主要紙の一面を飾った

近年では、最上位のA*と次点であるAの成績が多く、A以上の成績のインフレとなっているとの批判があったが、2年連続でその割合が減少¹⁰した。さらに、これまで体育、芸術やコミュニケーション・スタディなどのソフトな科目については、学術的な厳格さを欠くとの批判がされてきたが、2013年は、数学、物理、生物、化学、物理、地理などの従来のアカデミックな科目の受験者が増加した。これは、ラッセル・グループ加盟大学が、これらの科目を推奨したことが大きく影響しているとみられる¹¹。2010年の政権交代後、各大学は政府から割り当てられた定員枠とは別に、一定の成績以上のものについては、大学が無制限に受け入れられるようになったが、2012年は成績の見通しを見誤り、ラッセル・グループの大学にも多くの欠員が残ったままとなった。

¹⁰ 2013年のA-level試験受験者数は約86万人。うち、98.1%が不合格以外の成績(A*からE)をとった。A*またはAの成績をとった者は2012年より0.3%減少し、全体の26.3%だった。ABB以上の成績をとった者は12万人程度で、政府の予想通りの割合だった。

The Guardian <http://www.theguardian.com/news/datablog/2013/aug/15/a-level-results-complete-breakdown>
アクセス日 2014/01/08

¹¹ ラッセル・グループは、「Facilitating Subjects」として、数学、上級数学、物理、生物、化学、歴史、地理、言語学、国語(英語)を推奨科目としている。<http://www.russellgroup.ac.uk/faqs/>, アクセス日 2014/01/08

しかし 2013 年は、成績の基準を AAB 以上から ABB に設定し、十分な人数である約 11 万 5,000 人¹²の学生について各大学が獲得を競い合うことができる状況となった。第二章で記した Adjustment の制度を使って志望大学の変更が可能となった学生が多くなり、結果的に学生各人が自らの能力に合った大学を選択しやすくなったと評価できる。

以上のように、全体的に良く評価する紙面が多かったが、一方で、ラッセル・グループとそれ以外の大学の差が固定化され、後者に十分な目が向けられていないことに対する懸念も表明されている。政治家の中には、有名大学から成るラッセル・グループの大学のみを重要視する論調があるが、英国全体の教育水準を上げ、有能な人材の育成を図るには、ラッセル・グループに留まらず、より多くの大学が世界水準の教育を行うことができる状況にしなければならないとの意見もみられた。また、その他の懸念として、選択科目における男女間のギャップが拡大していることが大きく取り上げられていた。女子が物理・数学を避け、男子が語学を避ける傾向にあり、将来の就職に影響する深刻な問題として政府へ対策を求める大学関係者の声もある¹³。さらに、外国語科目の受験者は年々減少しており、フランス語、ドイツ語科目の受験者は 1996 年から 2012 年の間に 50%減少している。他の科目と比べて高い成績をとる者の割合が低いことが、学生が語学科目を受験することを敬遠する一因となっているとの指摘もあり、資格・試験監査を担う政府機関である Ofqual (Office of Qualifications and Examinations) は、成績付与の基準の見直しに乗り出している。EU 市場の重要性から、政府もこの傾向を重く受け止めており、公立の初等教育学 (Primary School) において外国語科目の授業を 2014 年より必須とすることを決定している。

最後に、注目すべき点として、THE TIMES、The Guardian 等の紙面には、英国の約 300 の私立高校および約 400 の公立高校について、学校別に受験者数、A*の成績者の率、B 以上の成績者の率が一覧にして掲載されていることを挙げたい。それによると、A*以上の成績者率が 50%以上の学校から 2%以下の学校まで、B 以上の成績が 90%以上の学校から 30%以下の学校まで、学校によって大きな違いがあることがわかる。ここまで明確に発表していることは驚きであり、透明性という面では感服するが、偏見や学校・地域間の格差を助長しかねないという懸念もあるのではないかと感じたのだが、周りの英国人に尋ねたところ、日本でいう偏差値表のような感覚で学校選びには欠かせない存在となっているようだ。ちょうど子どもの高校選びをしている英国人と話をする機会があったのだが、すべての高校は 5 年ごとに政府による抜き打ちの訪問チェックを受けることになっており、A-level 成績順位の低い学校は、政府から改善を促されるため、このような明瞭な公表は、むしろ最低基準の底上げになっているとの意見であった。

なお、大学入試からは話が逸れてしまうが、筆者が通っている語学学校の英語教師から聞いた中学校や高校への入学方法が興味深かったため、ここで少し紹介したい。まず、公立の中学校や高校は、その学校から一定の距離内に住んでいる住民は無条件で通うことができる。この距離内の地域は、Catchment area と呼ばれる。学校は、まず身体的障害等を持っている子どもを優先し

¹² なお、2013 年の大学出願者は約 67 万 7,000 人。2012 年比で 3.6%増であり、記録的な数となった。

2013 Application Cycle: End of Cycle Report

<http://www.ucas.com/sites/default/files/ucas-2013-end-of-cycle-report.pdf>, アクセス日 2013/01/08

¹³ 2013 年の A-level 試験では、物理の受験者の 4/5、数学の 2/3 は男子、一方国語 (英語) の 3/4 の受験者は女子だった。

て受入れ、その次に兄弟がその学校に行っている子ども、catchment area に住んでいる子どもを受け入れ、残りを試験により受け入れる。それぞれどの割合で受け入れるかは高校により異なるが、この試験に合格すれば、住んでいる地域に限らず入学できる。地元ではない、評判のいい学校に子どもを入れたい場合は、その高校の catchment area 内の地域に家族ごと引っ越すか、子供が試験を受けるかのどちらかを選択することとなる。筆者が話を聞いた英語教師も、新聞紙に掲載されているランキングを常にチェックしながら、子どもの学校を慎重に選択したいと話していた。

4. 大学関係者による受け止め方

4.1 マンチェスター大学(University of Manchester)でのインタビュー

訪問日時：2013年10月11日（金）15：00－16：00

対応者：Ms. Alison Charles, Undergraduate Admissions Manager

大学概要：

1824年創立の Mechanics' Institute に起源をもち、産業都市マンチェスターに位置する総合大学。学部生は2013年現在27,200名、院生は約8,300名にのぼり、英国最大規模の学生自治会をもつ。5,600名を越えるアカデミック・スタッフを含み、教職員数は約10,700名。ラッセル・グループ加盟大学のひとつで、25名のノーベル賞受賞者を輩出している。癌研究や生物学、工学、社会学等の分野に強い。2013-14 QS ランキング世界第33位（英国内第8位）。

本部アドミッション・オフィスに所属する学部レベルの入学を担当している Ms. Alison Charles にインタビューを行った。マンチェスター大学では、入学の可否を各学部に決定させる方針（Devolved Admission Process）をとっている。現在、英国では多くの大学が本部での可否決定（Centralised Admission Process）

を行っており、各学部の入学条件を教員が決定した後、その条件をもとに本部職員が可否を決定するのが主流である。しかし、マンチェスター大学は、規模が大きいことと学部の独自性尊重のため、各学部がそれぞれの条件・プロセスのものに可否を決定し、本部の関与は、学部に対して公平性に関するガイダンスを実施する程度にとどめている。各学部では、教員（Academic Tutor）が、前年の入学者数や就学状況等を考慮しながら可否基準を設定する。この基準にもとづき職員が評価し、判断が困難な場合には教員に相談する。

なお、A2試験の結果が出る前に暫定的な入学許可通知を出す現状のシステムについて尋ねたところ、基本的にはうまく機能しているとの意見だった。シックス・フォームをはじめとする高校のなかには、大学進学者数の増加を狙うあまり、A2試験結果を現実的な成績以上の予想スコアを出す場合もあるが、多くの学校ではGSCEのスコアに見合った予想を出すため、問題なく機能しているとのことだった。大学では、GSCE試験のスコアとA2試験の予想スコアとのバランスを確認し、志望動機書と推薦状も含めて総合的に可否決定を出す。また、学部によってはA-levelと

は別に試験の受験が必要となる。例えば医学部と歯学部では、UCAT (UK Clinical Aptitude Test)¹⁴ という試験の受験が必要となり、大学による面接審査も行われる。

印象的だったのは、願書一式に加え、志願者の社会的背景 (Contextual Data¹⁵) も加味している点だった。マンチェスター大学では、具体的には志願者の住所と所属学校を確認し、貧困層地域や、大学進学希望者輩出の実績が少ない学校からの志願の場合、考慮のうえ場合によっては優遇措置を行う。現在英国では、高等教育の機会拡大を目指し、入学審査時に成績以外の情報も使用することが推奨されている。大学によっては、困難な状況にある出願者に対して授業料の値下げを行っているところもある。マンチェスター大学では現在ではこの措置は行っておらず、Contextual Data を考慮したうえで入学させた学生が学業的にどの程度達成できたのか、十分なデータが蓄積されてから対応を考える方針とのことだった。いずれにせよ、この Contextual Data の活用に力を入れている点は、ラッセル・グループの大学の中で最も多くの低所得者層からの入学者を受け入れているマンチェスター大学のひとつの特徴と言えるかもしれない¹⁶。



写真2 ご自身の体験も踏まえながら、英国の入試制度の変遷を話してくださった Ms. Alison Charles

¹⁴ 特定の科目、大学において、A-level 試験以外に求められる Admissions Tests と呼ばれる試験のひとつ。難関のオックスブリッジや、競争率の高い大学における医学部、法学部等ではこの試験が対象となる。個々の大学で実施されているものではなく、例えば UCAT の場合、医学系、歯学系の大学コンソーシアムにより運営・実施されている。

<http://www.ucas.com/how-it-all-works/explore-your-options/entry-requirements/admissions-tests>

<http://www.ukcat.ac.uk/>, アクセス日 2014/01/26

¹⁵ 入学希望者の初等・中等教育における出身校や、出身地等の成績以外のデータ。SPA (Supporting Professionalism in Admissions) の報告書によれば、2012 年 11 月に実施したアンケートにおいて、67 の回答機関のうち 37% が Contextual Data を入学審査時に「使用した」、57% が「使用する予定」と回答した。

<http://www.universitiesuk.ac.uk/highereducation/Pages/contextualDataUniversityAdmissions.aspx>,

アクセス日 2014/01/16

¹⁶ マンチェスター大学は、貧困層の学生への奨学金、授業料免除に年間 500 万ポンドを超える資金を充てており、これはラッセル・グループ加盟大学のうち最も高い額である。The Times Good University Guide 2014, p.464-465

4.2 ノッティンガム大学(University of Nottingham)でのインタビュー

訪問日時：2013年10月13日（月）10：30－11：30

対応者：Mr. Robert Dowling, Director of Academic Services

大学概要：

ノッティンガム市郊外にあるメインキャンパスの他、マレーシア、中国にもキャンパスをもち、グローバル化に力を入れている。学生は海外キャンパスを含めてキャンパス間を自由に移動することができる。2013年現在、約6,500名の教職員をもち、学生数はノッティンガム、マレーシア、中国のそれぞれのキャンパスにて、約33,900名、約4,400名、約5,300名。ラッセル・グループ加盟大学であり、2013-14 QS ランキング世界第75位（英国内第14位）。

入試から履修手続き、学内試験から卒業までのサービスを所管する本部部署の Director である Mr. Robert Dowling に話を伺った。ノッティンガム大学では大部分のコースについて、教員が定めた基準をもとに、各学部ではなく本部職員が受験者の入学合否を決定している。

現状の英国における入学制度について尋ねると、学生は UCAS を通して複数の大学に申請することができ、合理的に機能しているとの評価だった。問題点としては、次の二点を挙げていた。一点目は、A-level の試験結果発表後の1、2日間の短い期間で、試験結果をもって志望校を再考し変更する学生も多く、一方で大学側は学生定員を管理するため再調整を行うこととなり、双方がパニック状態にならざるを得ない点である。二点目としては、公平性の問題を挙げていた。A-level の予想成績について、裕福で教育熱心な中流階級の人々の中には、子どもの成績について学校側により深く介入するため、比較的高い予想スコアを提出することとなる場合が多い一方、労働者階級の学生は実際の結果より低い予想を提出することが多く、最終ではないとはいえ、予想の段階で一時的な入学許可を出す現システムは、不公平を生み出すケースもあると指摘していた。A-level の結果発表を待ってから合否を決定する日程への改革案も議論にあがっているが、試験の実施を早めるか、入学時期を遅らせるかという学事暦の抜本的な変更を必要とするため、容易ではないといえる。

また、2012年度に一定の成績以上の学生を無制限に受入れることを政府が大学に許可して以降（注釈5参照）、各大学が学生を呼び込もうと大学間の競争が激化している。ラッセル・グループの大学の中にも、A-level の予想成績の段階で、無条件入学許可を出す大学が出てきた。これは該当の大学へ入学するのであれば、試験の結果に関わらずその学生を受入れるということである。このような動きは、大学業界全体に悪影響を与えるとして、学位のもつ価値を守るためにも、UCAS による全大学の統ルールをつくる必要があると Dowling 氏は語った。

また、インタビューの中で印象に残ったのは、国際化により入試・入学において大学側が配慮すべき点も多様化していることだった。ノッティンガム大学では、英国内のキャンパスに通う学生のうち27%は留学生である¹⁷。A-level 以外の国際バカロレアや他の資格試験により志願する

¹⁷ <http://www.nottingham.ac.uk/about/facts/studentpopulation20122013.aspx>, アクセス日 2013/11/16

学生も多い。A-level 試験とその他の各資格の換算基準は、各大学が決定している。UCAS による換算のガイドラン¹⁸はあるが、最終的には大学の決定にゆだねられているため、海外からの学生が英国の複数大学に申請すると、各大学がそれぞれ異なる基準で換算することになる。この現状に対し、効率化を図り UCAS がまとめて資格換算を行ってはどうかとの意見も大学側からあるようである。また英国内の学生と海外からの留学生の区別が近年益々複雑になってきているとのことだった。両者に異なる授業料を課しているため、この区別は大変重要である。英国または EU における居住年数や、英国に居住したことがなくても両親が英国内に資産を所持しているか等、大学は法律家と緊密に相談しながら法的公平性を保つことが求められている。



写真 3 大学間の競争が激化する今、大学が抱えている課題を率直に話してくださった Mr. Robert Dowling

4.3 キングス・カレッジ・ロンドン

(King's College London)でのインタビュー

訪問日時：2013年11月5日（火）16:00–17:00

対応者：Mr. Michael Hughes, Senior International Officer, External Relations Directorate

大学概要：

1828年創立でイングランドで四番目に古い大学である。5つのキャンパスのうちの4つが、ロンドン中心部のテムズ川沿い1マイル四方内にある。人文学、法学、国際関係学等の分野に高い評価がある他、精神医学、看護学等の医学分野が強く、医師や専門家の養成においてヨーロッパの中心的な役割を果たしている。2013年現在、学部生は約12,800名、院生約6,400名、教職員約6,500名。2013-14 QS ランキング世界第19位（英国内第6位）。ラッセル・グループ加盟大学。

¹⁸ A-level や国際バカロレア、アメリカ・カナダの AP 試験等の換算表があり、Tariff Table と呼ばれる。

<http://www.ucas.com/how-it-all-works/explore-your-options/entry-requirements/tariff-tables>, アクセス日 2014/01/15

大学のブランディングや、マーケティング、広報・渉外活動、留学関係を担っている部署で、国際マーケティングチームにおいて日本と中国を担当している Mr. Michael Hughes にお話を伺った。

現状の英国の入学制度については、効率的でよい制度だと思うが、最もよく批判を受ける点を挙げると、学生があまりに早い段階で自分が大学でどの専攻に進みたいのかを決めなければならないことだろうとのことだった。中学校の二年次である 16 歳の時点で、志望する専攻が定まっている場合には、GCSE 試験において、選択科目から必要な科目に絞って受験できるが、まだ決まっていない場合には、必要とされている以上の多数の科目を受験しておく学生も多い。GCSE の受験科目のなかから、AS 試験では通常 4、5 科目、A2 試験では 3、4 科目に絞って受験することになるので、GCSE レベルにおいて誤った科目選択をしてしまうと、将来、大学の希望学部を受験できなくなってしまう可能性があるからだ。加えて、英国の大学では一年次から専攻の専門分野を勉強することになるので、とにかく早期に自分の志望分野を見極めておかなければ、効率的な教育課程に進めない恐れがある。この状況を踏まえ、KCL は 2013 年より、Liberal Arts 学部プログラム¹⁹を新たに創立した。このプログラムでは、一年目に最大 6 つまでの科目を選択でき、自分の興味や将来を熟考したうえで、専攻の決定を二年目に行うことができる。新設のプログラムだが、人気を集めたとのことであった。

このように、受験科目の決定をする時期が早すぎるという批判がある一方で、特定分野での専門性をスムーズに身に付けられるという点では、現在のシステムは高く評価できるとの意見だった。Hughes 氏も、研究したい分野が GCSE 受験前から明確だったため、早くから自分の興味のある分野の専門的な勉強に専念することができてよかったと、ご自身の経験を話していただいた。また、インタビューの中で成人の定義について話題がのびた。日本では 20 歳、米国では 21 歳であるのに対し、英国では 18 歳を成人とし、自分の選択に対し責任を持つことが求められる。早い時期に科目を設定することも、英国の文化的なものが背景にあるのかもしれないとのコメントが印象に残った。

Michael 氏は日本のセンター試験の制度についての知識もある方だったが、数点の差が合否に影響することのある日本と異なり、A-level 試験の評価はバンド制であるため、必然的に成績以外の材料も重要になるため、より多面的に評価できるのではないかとの意見だった。学内での入学者選抜について尋ねたところ、競争率の高いコースでは、多くの志願者が A-level の成績条件は満たしてくるので、志望動機書を重視するとのことだった。特に受験学部の学問内容に関連するインターンシップやサマースクール等の学外の経験を重要視するため、ボランティア活動等の学合以外の活動を重視する傾向にある米国と、成績重視の日本の中間に位置するのではとの印象を持っていた。



写真 4 日英の違いに注目しながら答えてくださった Mr. Michael Hughes

¹⁹ <http://www.kcl.ac.uk/prospectus/undergraduate/liberal-arts>, アクセス日 2013/11/29

4.4 ギャップ・イヤー

今回、上述の3大学に、入学システムと併せてギャップ・イヤーについても伺った。ギャップ・イヤーについては、筆者の本務先である東京大学でも2013年4月の学部入学者を対象として新たに取組みを始めたところであり²⁰、ギャップ・イヤーの発祥地といわれる英国の状況には以前から興味をもっていた。

インタビューの結論としては、3名とも各自の大学においてギャップ・イヤーの取得を推奨しており、その傾向は英国全体に当てはまるだろうとの意見だった。活動内容は、企業でのインターンシップや海外経験、また近年の英国の経済状況や授業料の値上がりを背景とした資金獲得のための勤務経験等、多岐にわたるが、入学後の学問内容に必ずしも直結しなくとも、社会的経験を積むことに対して、非常にポジティブに捉えることが一般的のようだった。あえて懸念される点を挙げるとすると、数学科や工学科といった学科については、大学によっては学生が勉学から離れることで学問の知識を忘れてしまうことを恐れ、取得に消極的なケースもあるとのことだった。この点は大学入学前から専攻分野に絞った専門的な学習を行う英国ならではの懸念と言えるかもしれない。ただ、今回のインタビューで印象的だったのは、どの担当者も、ギャップ・イヤーは、推奨する、しない以前の、学生のもつ当然の選択肢の一つであるという認識をもっていたことだった。

なお、ギャップ・イヤーは、大学側が制度として整え、学生に提供しているものではなく、学生各自にすべてが任せている。ギャップ・イヤー取得中の学生へは、授業料や開講コース、単位制度の変更等の情報については大学からコンタクトを取り続けるが、活動内容等については学生個人に完全に任せられており、各人が責任をもつこととされている。

また、ギャップ・イヤーは入学前でも後でもどちらでも取ることができる。ギャップ・イヤー取得を大学出願前から決めていて、例えば2013年に出願し、通常は2014年9月入学のところ、一年間遅れての2015年9月の入学を希望する学生は、2014年9月入学の学生と同じ枠・条件で合否が決定される。ギャップ・イヤーを取得した後に大学に出願する場合、A-level試験結果に時効はないため、過去に受験したA-level試験結果をもって、入学を希望する年の審査サイクルに出願することができる。単なる入学試験ではなく、資格試験としての性質をもつA-level試験制度の柔軟性も、ギャップ・イヤーの取得を容易にしている大きな要因の一つだと思われる。

5. おわりに

筆者が英国の大学入試制度について調べようと思ったきっかけのひとつは、冒頭で述べたように、日本での入試改革の動きであった。高校在学中の試験成績や学業実績を含め、総合的に合否を判断する英国のシステムから、日本が参考とすることができる部分があるのではないかと思ったからである。実際に入試制度を調べてみると、英国においても、日本同様に常に改革の中にあ

²⁰ FLY Program (Freshers' Leave Year Program, 初年次長期自主活動プログラム)
<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/info/academics/zenki/fly/>, アクセス日 2014/02/11

ることがわかった。AS 試験と A2 試験からなる現在の A-level 制度は、2000 年にトニー・ブレア首相による労働党政府によって導入されたものである。シックス・フォーム一年次に受験する AS 試験と二年次に受験する A2 試験は、いずれも冬と夏の年二回実施しており、在学中に四回受験の機会がある。保守党・自由民主党の連合政権のマイケル・ゴーブ現教育相は、大学入学資格試験を夏の A2 試験のみとし、AS 試験については引き続き実施はするが、2015 年度からは入試とは関係のないものとする計画を打ち出している²¹。これは、再受験が可能なため集中力を欠いてしまう学生がいることや好成績のインフレ、また、試験を重視するあまり高校での教育が形式的なものとなっており、大学入学時に必要な深い理解や思考力を備えていない学生が増えている現状の改善が目的とされている。試験に縛られない、より自由な教育が行えるとして、この動きを歓迎する高校がある一方で、ケンブリッジ大学を始めとする多くの大学は、合否判定の際の有力な判断材料がなくなってしまうとして、AS 試験から入試試験の性質をなくすことに強い反発を示している²²。

また、現在の制度では、大学は、A2 試験の結果が出る前の段階で、その予想スコアに基づいて暫定的な入学可否を決定することとなり、これには英国内でも幾度となく入試スケジュールの変更を含めた改革の議論が起こってきている²³。予想スコアが不正確であるとの指摘もあるため、政府 (Department for Business, Innovation and Skills) は近年、A2 試験の予想スコアの正確性について調査を行っている²⁴。ただし、筆者がインタビューを行った大学関係者の話からは、前述した通り、現行のシステムで基本的にはうまく機能しているとの声が強かった。

大学入試制度は、公平性や正確性について、多くの人々からの関心を集める議題である。それだけに改革に対する反応は多様であり、それは日英に共通している。今回、日本とは全く異なる英国の入試制度を調べることにより、筆者にとって日本の現状をより客観的にみるきっかけとなった。効率性を追求しながらも公平性・透明性の保持を目指す英国の入試システムから日本が学ぶことのできる点が多いのではないだろうか。一方で、制度とその背景にある文化や価値観のつながりに目を向けることも重要だと感じた。英国の大学入試制度について、今後どのような変化が起こっていくのか、引き続き注目していきたい。

²¹ <https://www.gov.uk/government/publications/letter-from-the-secretary-of-state-for-education-to-glenys-stacey-at-ofqual-2>, アクセス日 2014/02/11

²² <http://www.bbc.co.uk/news/education-21156370>, アクセス日 2013/02/10

²³ UCAS Admissions Process Review Consultation
<http://www.ucas.com/sites/default/files/apr-consultation.pdf>, アクセス日 2013/12/17

²⁴ 報告書によると、2012 年の夏に実施された A-level 試験において正確な予想が出されたとされる割合は、42%であり、引き続き慎重な分析が必要とされている。実際の成績を上回る予想が出される場合が多く、予想を上回る結果となった学生が 11%だったのに対し、48%の学生が予想を下回る成績となった。この報告を受け、大学関係者からは、出願時に既に成績が出ている AS 試験を、大学入学とは関係のないものとする現在の改革の動きに疑問の声も出ている。

Accuracy of predicted A level grades: 2010 UCAS admission process

<https://www.gov.uk/government/publications/accuracy-of-predicted-a-level-grades-2010-ucas-admission-process>,

アクセス日 2013/12/18

謝辞

本報告書作成にあたり、お忙しいスケジュールの中インタビューに快く応じてくださったマンチェスター大学、ノッティンガム大学、キングス・カレッジ・ロンドンの皆様、ならびに研修を通して様々なご指導をいただきました平松幸三センター長、松本秀幸副センター長をはじめとする JSPS ロンドン研究連絡センターの皆様、そして 2 年間の研修を支えてくださった日本学術振興会と東京大学の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 教育再生実行会議配布資料 (<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaicei/>, 2014 年 1 月現在)
- UCAS ホームページ (<http://www.ucas.com/>, 2014 年 1 月現在)
- 英国政府 “Autumn Statement 2013” (<https://www.gov.uk/government/publications/autumn-statement-2013-documents>, 2013 年 12 月 5 日発表)
- Admissions to Higher Education Steering Group “Fair admissions to Higher Education: Recommendations for good practice” (<http://www.admissions-review.org.uk/downloads/finalreport.pdf>, 2004 年 9 月発表)
- SPA ホームページ (<http://www.spa.ac.uk/>, 2014 年 1 月現在)
- Universities UK ホームページ (<http://www.universitiesuk.ac.uk/>, 2014 年 1 月現在)
- The Guardian 電子版 15/08/2013 “A-level results 2013: the complete breakdown”
- The Russell Group ホームページ (<http://www.russellgroup.ac.uk/home/>, 2014 年 1 月現在)
- UCAS “2013 Application Cycle: End of Cycle Report” (<http://www.ucas.com/sites/default/files/ucas-2013-end-of-cycle-report.pdf>, 2013 年 12 月発表)
- マンチェスター大学ホームページ (<http://www.manchester.ac.uk/>, 2014 年 1 月現在)
- ノッティンガム大学ホームページ (<http://www.nottingham.ac.uk/>, 2014 年 1 月現在)
- キングス・カレッジ・ロンドンホームページ (<http://www.kcl.ac.uk/index.aspx>, 2014 年 1 月現在)
- 東京大学教養学部 FLY Program ホームページ (<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/info/academics/zenki/fly/>, 2013 年 11 月現在)
- 英国政府 “Letter from Michael Gove to Ofqual” (<https://www.gov.uk/government/publications/letter-from-the-secretary-of-state-for-education-to-glenys-stacey-at-ofqual--2>, 2013 年 3 月 14 日発表)
- BBC ホームページ (<http://www.bbc.co.uk/news/>, 2014 年 1 月現在)
- UCAS “Admission Process Review Consultation” (<http://www.ucas.com/sites/default/files/apr-consultation.pdf>, 2011 年 10 月発表)
- 英国政府 “Accuracy of predicted A level grades: 2010 UCAS admission process” (<https://www.gov.uk/government/publications/accuracy-of-predicted-a-level-grades-2010-ucas-admission-process>, 2013 年 11 月 5 日発表)
- THE TIME “Good University Guide 2014”